

論文要旨

学位論文題目 「礼装規範の形成と近代日本」

氏名 小山直子

本研究は、明治初頭から昭和初期にいたる期間を対象として、当時の社会において礼装として扱われた衣服形態に関する事象を史料に抽出し、礼装規範の形成過程を検証したものである。分析の視座を「近代日本の国家体制」と「それが表出した礼装に関わる様々な規定」との連動におき、近代国家の形成と礼装規範の形成との間に存在した関係性を言語化して取り出すことを目論みとした。具体的分析は、公的記録と新聞・雑誌の報道記事を史料として、主に国家行事やそれに準ずる行事や会合の場への参列者に対する服装指定に関わる事象を抽出し、人々の礼装の調達・着用動機に着目することにより行った。

本論文は、序章および4つの章と終章から成る。

序章では、研究の目的や視座を示し、近代日本服飾史の先行研究を総括したところに、「通常礼服」や「通常服」、「白襟紋付」という用語を取り出すに至った経緯を述べた。これまでの近代日本服飾史研究では、「通常礼服」は「燕尾服」に、「通常服」は「フロックコート」に、「白襟紋付」は「紋付」という用語に置き換えられて考察の対象となってきた。それがために衣服が国家の服装規定に連動する存在として、時代の中に息づいていた事実を見過ごしてきた状況にあったことを指摘した。

第1章「近代日本における新服制の制定と礼装事情」では、近代日本における一般男子の礼装規範の形成において重要な位置をしめる「通常礼服」や「通常服」という国家の服装規定が制定された経緯と、明治前半の国家体制の中で「通常礼服」がどのような存在として扱われていたのかについて、主に法令とその成立時の関係文書にあたって検証した。まず、明治5年11月12日の太政官布告(339号)にある「上下一般通常ノ礼服」(四文字熟語化して「通常礼服」という部分を糸口に見直した。次に、明治10年9月の太政官達(65号)において、官吏に対して通常礼服の「換用」としてフロックコートの着用が許された時の事情を公文書に探り、通常礼服に指定された燕尾服が西洋習俗に照らした場合に夜会服であったことが問題視され、昼間の行事への対応を含んで許されたことを指摘した。また、明治21年に宮中参内時の服装指定のために宮内省が出した「通常礼服は燕尾服、通常服はフロックコート」を意味するという内容の達が、その後、宮中以外の場にも適用される国家の服装規定の枠組みとして機能していった経緯を明らかとした。

第2章「近代日本におけるフロックコートとシルクハットの普及—「通常服」「黒高帽」という国家の服装規定—」では、明治後半においてフロックコートとシルクハットの組合せが「通常服」「黒高帽」という用語をもって国家行事の服装規定として機能するようになった状況と理由について検証した。明治30年代後半には西洋におけるフロックコートとシルクハットの流行は凋落するが、日本においてはその頃に益々隆盛する方向に向かった。その普及には、天皇が臨席する国家行事やそれに準ずる場への参加者に対して徹底された「通常服(=フロックコート)」「黒高帽(=シルクハット)」という服装指定が深く関わっていた。本論文では「通常服」「黒高帽」が当時、宮中の威光が刻印された国家の服装指定として認識されており、そのことが紳士を自認する人々

の調達動機となって働き、フロックコートとシルクハットの普及が促進される現場となっていたことを明らかにした。

第3章「明治後期から大正期における紋付羽織袴の社会的地位—通常礼服に起因した礼服問題一」では、紋付羽織袴が明治20年代後半には国民の多くに所持される礼装となりながらも、宮中参内が許される「礼服」としては認められることはなく、勲章佩用の服装としても公許されることなく黙許状態が継続されており、国家的には「冷遇」される状況にあったことを検証した。このような状況に対する異議申し立ての表れとして、明治42年と大正14年の帝国議会衆議院に提出された建議案を取り上げた。その審議内容が速記された委員会議録の分析からは、宮中が通常礼服や通常服の定義に関しての裁量権を持ち、「何を礼服とし、何を礼服とは見做さないか」という問題は、政府も帝国議会も手が出せない領域にあったことを言語化して取り出せた。そのような中で、紋付羽織袴を礼装とする人々が拠り所としたのは、一つは、明治10年の太政官の達(65号)の但書において、各庁の長官の裁量により判任官以下に対して、通常礼服の「代用」として紋付羽織袴の着用が許されたという法的な足跡であり、もう一つは、「紋付羽織袴は日本固有の礼服」「日本人が最も古来より仕来りの羽織袴」に見るような世間の謳い文句であった。大正14年当時、帝室博物館勤務の考古学研究者高橋健自博士は、このような認識のされ方を「徒に羽織袴を称讃して我国古来の礼服である如く想っている俗論」であると、数々の史料に基づき立証してはいるが、これは明治30年代後半からの新聞や雑誌だけでなく、本論文で取り上げた衆議院での委員会議録においても議員たちの発言に盛んに見出せる謳い文句であった。本論文では紋付羽織袴を礼装とする人々が、紋付羽織袴が国家の服装規定に残した僅かな法的な足跡とささやかな歴史性を拠り所として、それを自分たちの「礼服」として見做していった過程を検証した。

第4章「近代日本における一般婦女子の礼装規範の形成—歴史的事象としての「白襟紋付」—」では、一般男子との比較という観点から、国家あるいは宮中との関わり方に注視して白襟紋付を分析した。女子の洋服化を奨励する服装規定は、明治前半において宮中の婦人服制という形で出されていたが、皇族女子を除き、この服制に応じた女子は少なかった。それに対して、華族や高級官吏の夫人をも含んだ女子全体に普及した礼装が「白襟紋付」であった。本論文では、女性たち自らが横並びの自主規制的な営みの中で「白襟紋付」を礼装として通用する着想形態に作り上げ普及させるにいたった現場を抽出した。

以上、第1章から第4章では、近代日本において、国家の服制の枠組的存在として、洋服礼装である「通常礼服(=燕尾服)」「通常服(=フロックコート)」が礼遇された地位にあったこと、その一方において、一般男子の和服礼装である「紋付羽織袴」は国家の服制という点において冷遇された地位にあり続けたこと、そして、一般女子の「白襟紋付」は自主規制的な形成過程を経て普及し、その結果、国家の服制にも採用され、社会的地位を昇格させる経緯を辿ったことを明らかにした。

終章では、日本服飾史に加えられた新たな知見と共に、礼装規範の形成に顕在化した近代日本形成における「宮中と府中の別」などの国家体制の構図が、これまで言語化されずに了解事項とされてきた日本文化の形成の根幹を研究する際の新たな分析軸となる可能性に言及した。

外国語要旨

学位論文題目 The Formulation of a Formal Dress Norm and Modern Japan

氏 名 OYAMA Naoko

This Ph.D. thesis investigates the formulation of a formal dress norm, from the early Meiji to the early Showa period, by analyzing official documents and newspaper articles about the style of clothes treated as formal dress by the nation. The findings include the fact that, on the one hand, the development of a formal dress norm in which men adopted European-style clothing acted in concert with the formulation of the nation-state. On the other hand, Japanese-style clothing, such as the crested kimono with *haori* and *hakama* for men and the crested kimono with a white collar for women, became popular as the people's formal dress, although it was never officially approved as the national dress code.

The introductory chapter provides an overview of the history of modern Japanese dress. Chapter one, entitled “The formulation of the new clothing system and the state of formal dress in modern Japan,” reveals a relationship of overlap between the formal dress norm and the national regime by taking particular note of the terms “*Tsujou-reifuku* (ordinary formal dress)” and “*Tsujou-fuku* (ordinary dress),” which appear in official documents but have previously been overlooked. This paper argues that two official documents—a *Dajokan* declaration in Meiji year 5 (1872) presenting “ordinary formal dress (the swallow-tailed coat)” for ordinary men and a circular notice from the Imperial Household Ministry in Meiji year 21 (1888) presenting a distinction in the statement, “Ordinary formal dress and ordinary dress are represented by the swallow-tailed coat and the frock coat, respectively”—functioned as the national dress code and provided a framework for formulating the formal dress norm of modern Japan. Chapter two, entitled “The diffusion of the frock coat and silk hat style in modern Japan: ‘*Tsujou-fuku*’ and ‘*Kuro-takabou* (silk hat)’ as the national dress code,” argues that, although in Meiji year 10 (1877) the frock coat was approved for government officials to use as an alternative to ordinary formal dress in order to adjust to Western manners so that formal dress could be worn in the daytime. The frock coat and silk hat style disappeared in the West around the Meiji mid-30s. In contrast to the Western mainstream, this style prospered in Japan as the formal dress of gentlemen. This was due to the dress code established by the nation. Chapter three, entitled “The social status of the crested kimono with *haori* and *hakama* from the late Meiji to the Taisho period: Formal dress issues caused by the ordinary formal dress,” argues that although many people owned the crested kimono with *haori* and *hakama*, it was treated coldly in that it was never approved as formal dress appropriate for entering the emperor's court, and wearing decorations on it was not formally approved, although it was tolerated. An objection was submitted to the deliberation of the Lower House, which protested that the Imperial Court had absolute discretion in

regulating formal dress and ordinary dress, and the government at the time lacked even the power to update them. Chapter four, entitled “The formulation of a formal dress norm for common women in modern Japan: ‘Crested kimono with a white collar’ as a historical phenomenon,” is an analysis that pays particularly close attention to the formal dress norm’s relationship with the nation and the imperial court as well as to the contrast with the case of men’s dress. This chapter concludes that the widely popularized formal dress for women, with the exception of the imperial family, was the “crested kimono with a white collar,” a Japanese-style of clothing that ignored the Western-style dress code that the Imperial Court advocated. That is, it succeeded in extracting the spot where common women elaborated so that the “crested kimono with a white collar” now functions as formal dress by obeying a self-imposed guideline.

The concluding chapter, in addition to discussing new findings on the history of Japanese fashion, suggests that the composition of the modern Japanese nation resulted from the separation between the Imperial Court and the government, which expressed itself in the formulation of a formal dress norm. This could be a new angle for investigating the basis of Japanese cultural formulation, although it has so far been considered a tacit, unspoken point of agreement.